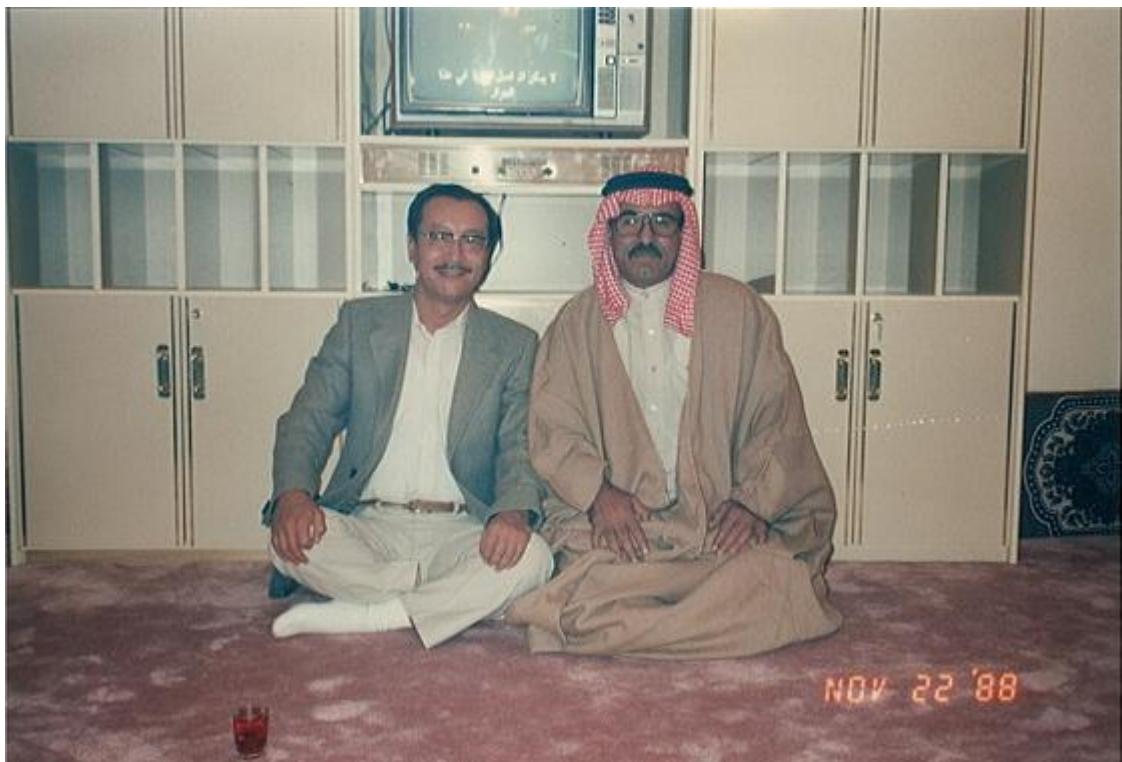


『砂漠の国の柔道場』 『第八話』 アブ・イヤドとの信頼関係

岡本文夫 (元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書)



アブ・イヤド邸には度々お招き頂いたものだった



東京の我が家でのイヤド（北海道工業大学）の卒業祝い
ハッサン（日大）もお祝いに来てくれました。

アラブ社会では、本名で名前を呼びかけるのは他人行儀とされ、信頼関係の表し方として長男の名前の前に『Abu (アブ) {父}』と付けて呼び合う。長男の名前が『Eyad』であれば、『Abu Eyad (アブ・イヤド) {イヤドの親父}』と呼ぶ。つまり、あなたの一家のことは、そこまで大切に思っているという意思表示であり、一朝有事でもあれば放っておかないぞという深い関係を意味している。因みに、母親の場合は『Umn Eyad (ウンム・イヤド) {イヤドの母}』と呼ばれる。

従って、親交を結ぶに到ったアラブの友人たちは、筆者のことを『Abu Eiichirou(英一郎の親父)』と呼んでくれた。

さて、そのアブ・イヤド氏だが、本名は Mr.Mohammad Al Subei という石油省の高官だった。二回目のカフジ勤務と同時に岡本道場は再開したのだが、弟子の中にイブラヒムという俊敏な少年がいて、彼がアブ・イヤドの次男だった。

息子に対する柔道指導を感謝してくれた彼は、時々筆者を自邸に招待してくれた。政府高官居住区の目の前は直ぐアラビア湾となっており、日本人は魚が好物だろうと、イブラヒムは釣りをしてくれていた。アブ・イヤドは、これを塩焼きにして供して筆者を喜ばせてくれた。

テレビ（放映局は一応二つあるのだが）など見ないカフジの夜長を、お互いの人生の故事来歴を開陳し合って楽しく過ごすことが出来たものだった。

アブ・イヤドから頼まれたのは、アラビア石油のスカラシップで北海道工業大学に留学中の長男イヤドのことだった。長期休暇で一時帰国した時や本社帰任した際には、長男の事をよろしく面倒見て欲しいのことだ。「Why not！」ではないか。

元々、筆者はアラブ人留学生とは縁が深かった。学生を日本に連れて行く前に、日本人教師がカフジに来て半年間オリエンテーションするのだが、『What is Japan ?』を教えるために、筆者は協力を求められるのが常だった。カフジ地区のガバナー (Amir) に次ぐ NO.2 の存在である裁判官の長男ハッサンのオリエンテーションでは、日本人の家庭はどんなものかと教えるために、カフジの社宅へ招待した。また、彼が日大へ留学した頃、筆者も本社帰任していたので、里親的な拙宅へ遊びに来てくれて、長男の遊び相手になってくれたものだった。

オリエンテーションの一助として、日本人教師が留学生たちを筆者の柔道場へ入門させるのもルーチンとなっていた。しかし、残念ながら彼らの中で長続きした学生はいなかった。理由を訪ねたら、思わず笑ってしまった。弟子として定着している少年や子供たちは、「icbi (一)」から「jyuu (十)」までの掛け声を間違いなく言えるのに、学生たちがトンチンカンな掛け声を掛けるものだから、からかわれて馬鹿にされるからだという（笑）。

それでも、当時、柔道の初步を教えたイスカンダールなどは、大東文化大学で学んだ後に外交官として駐日サウディアラビア大使館員となり、筆者の二度目の本社帰任の際の総務部任務にはいろいろと便宜をはかつてくれたものだ。

脱線ついでに、笑い話をひとつ。イスカンダーは筆者の趣味を承知してくれており、釣りに招待してくれるという。ブルーナンバーの大天使館車2台が向かった先は、横浜の本牧埠頭だった、

「おい、ここは侵入禁止のコンテナヤードじゃないか！」

「Sensei, No Problem. 僕たち、日本語解らなーい。Sensei もサウジ人に化けていて下さい。」

勿論、警備員数名がすっ飛んできて、退去を命じるのだが、対話が成立しない。

車は外交ナンバーだし、警備員は諦めてイスカンダールたちの居座りを見過ごさざるを得なかつた。現地帰りの筆者はまだ日焼けしていたしヒゲは定着していたので、片言のアラビア語を喋つていればよかつた。通常は釣り禁止エリアだけに、カサゴの豊漁だつた。頭の大きな魚を食べない彼らは、釣果を全部プレゼントしてくれたので、それから数日に渡つて煮つけやアラ汁を堪能することが出来た。(笑)

さて、北海道工業大学へ留学中の長男イヤドくん。拙宅へ招待してカフジの家族の近況を伝えたり、女房の手料理をご馳走したりしたのだが、感心なことに北海道名産の大きな夕張メロンをお土産に持参してくれた。勿論、我が長男も可愛がつてくれた。筆者のカフジでの活動を紹介するために、行政当局の依頼によるカフジ最大のイベントであるカフジマラソン会場での柔道デモンストレーションのアルバムを見せたところ、イヤド曰く。「ああ、これ僕ですよ」。カフジ最大の行事を盛上げるために、馬術クラブにも動員がかかつており、グラウンド内周をサラブレッドに行進させていた。柔道デモはその内側のグラウンド真ん中で行つていたのだが、行進の騎手を務めていたイヤドも、当然筆者の活動を横目で確認してくれていた訳だ。新たな接点を確認して、話題が大いに盛り上がつたことは言うまでもない。

北海道に戻つたイヤドからは、招待への感謝を表明する丁寧なメッセージを添えた郵送物が届けられた。中身は、日本モスレム協会刊行の『日亜対訳 注解 聖コーラン』の大著だつた。サウジ人が感謝を表すための最高の贈り物ではないか。

勿論、イヤドからの心尽くしの贈り物は現在も筆者の書架の中心を飾つてゐる。

では、アブ・イヤド一家のこの心憎いほどの気配りや礼儀正しさはどこから来るのだろう。カフジの夜長を語り合つた依つて來たる人生談義に寄れば、元々アブ・イヤドは隣国カタールの王族の一員だつたとのことだ。ところが、王位継承を巡る骨肉の争いに巻き込まれ生命の危険を感じた母親は、幼いアブ・イヤドを連れてカタール半島の対岸に位置するサウディアラビアの漁村カティーフに逃れ、アブ・イヤドはその逃避地で成人した。

まるで、平家の刺殺から逃れるために幼い源義経を連れて大和に逃れた常盤御前のドラマに酷似するではないか。アブ・イヤドが経験した辛酸や苦労が、彼の思いやり深い誠実な人柄を育んだのではないかと推察出来る。直接の業務上の関係はないにも拘わらず、筆者が統括するシッピング事務所のスタッフ全員からもアブ・イヤドは尊敬

されていた事実が、彼の人徳が廣く理解されていた証である。

親しく交流したとは言え、彼との実務上の関係は全くなかった。しかし、一度だけ大変痛快な思いとともに助けられたことがあった。

カフジの鉱業所には日量 3 万バーレルの小規模製油所が設置されており、来航タンカー用燃料や現地の造水プラントへの重油供給やコーストガードの舟艇へのディーゼル油供給のために 4 種類の石油製品生産を行っていた。

日本企業とはいっても、鉱業所の操業は石油省の厳格な管理下にあった。各種タブーの中でも原油や石油製品の漏洩事故には最も厳しいペナルティが課されていた。

筆者の業務責任範囲は、来航タンカーへの原油積み出しだけではなく、こうしたローカルサプライも含んでいた。老朽化したディーゼル油のパイplineに漏洩の予兆が見て取れたので、パイplineの引き直しが必要と判断された時のことである。

プロジェクト・エンジニアリング部に設計図面を引かせて、筆者がカバリングの申請書を作成して石油省の工事許可を得ようとした。石油省の担当部長は申請書を手渡すと、一瞥もくれることなく、「フンッ！」と言って床に放り投げたではないか。

何たる無礼！（怒）許可を得たかったら、何か持って来いという典型的アラブ式駆け引きだ。筆者自身の利益を図ろうとする訳でもなく、石油省の指示通り安全な石油操業を図ろうとする行動に対して、るべき態度ではない。しかし、悔しいかな許認可権限は絶対的に相手側にある。ここで難しいのは、投げ捨てられた申請書類を慌てて拾い集めるのは、精神的に完全に風下に立つことになる。筆者は内心の激怒を押さえ、ワン・ジョークを振った。

「ワオッ、投げるのうまい！アメリカ留学中に野球でもやってたの。ハハハ」。

『テメエ！今に見てやがれ！』。筆者は直ちにアブ・イヤドの事務所に向かった。

「おや？珍しいじゃないですか、ミスター岡本。今日はどうされましたか（笑）」

自邸には度々お邪魔しているにも拘わらず、事務所を訪ねるのはこれが初めてだった。ことの顛末の説明を受けたアブ・イヤドは、瞬時に激怒を共有してくれた。

受話器を取ると、「ワワワッ！」と怒鳴りつけた。アラビア語の中身は皆目解らなかつたが、岡本を舐めるとタダじやおかん！くらいの抗議だったと推察した。

「OK、ミスター岡本。話は済みました。もう一度行ってみてください」。

部長は揉み手しながらお愛想笑いで迎えてくれ、その豹変ぶりには笑ってしまった。

「ミスターもお人が悪い。なんで最初にアブ・イヤドの知り合いだって言ってくれなかつたんですか」。

石油省内部の職制についてはよく解らないのだが、なにしろアブ・イヤドは偉いらしのいのだ。おかげで、ディーゼル油ラインの漏洩事故は未然に回避することができた。

アブ・イヤドは茶目っ気たっぷりの性格だった。

1991 年 1 月 17 日の湾岸戦争勃発に先立つ半年間は『湾岸危機』と称される恐怖に満ちた期間だった。サダム・フセインの理不尽かつ突然のクウェイト侵攻に対して米国

を中心とした多国籍軍が結成されイラク軍の即時撤退を要求した。この一連の流れの中で、クウェイト国境に隣接したカフジ地区の守備のためにはカタール軍とセネガル軍が配備された。一度、移動中のセネガル軍を目撃したのだが、隊列を組むのは苦手なのか、規律と覇気が感じられず、本当にセネガル軍が役に立つかとの疑問が湧いてきたものだ。

湾岸危機突入後の1か月くらい過ぎた頃だったろうか、アブ・イヤドから呼び出し電話があり、従弟が来ているから顔を出さないかとのお誘いだった。

毎度のことなので、気楽に訪問した筆者は驚愕した。アブ・イヤド邸の前には重戦車が一輛止まっているではないか。政府高官居住区に戦車が出入りすること自体が尋常ではない

邸内には4人の軍人がおり、ボスはツールにもたれたまま鋭い視線を送ってきたが、部下の3名はバッと立ち上がって警戒姿勢をとった。

「いや、いいんだ、いいんだ。日本人の友人を紹介したくて呼んだんだ」。

アブ・イヤドは笑顔でとりなしてくれた。紹介された従弟とは、多国籍軍の一員となつたカタール軍の司令官だった。お互いを驚かせる出会いは、アブ・イヤド一流のいたずらだったのだ。軍司令官に対して年長者として話すアブ・イヤドは、彼が王族の一員だったと称するのがハッタリではないことが見て取れた。

筆者は、司令官が腰に装備している拳銃が気になった。将軍である証拠に装備も立派である。拳銃は、かつてのドイツ軍の名銃・ルガーに似ていた。

「将軍。ちょっとその拳銃をさわらせてくれませんか」。

この俺様に向かって何を抜かすか、無礼者！と、ムッとする司令官に、アブ・イヤドがとりなしてくれた。

「いいじゃないか。この日本人は、格別な友人なので、ちょっと触らせてあげてくれ」。『仕方ないなあ』という風情で、将軍は引き金脇のボタンを押して弾倉カートリッジを抜き抜き、遊底をガチャガチャとスライドさせて弾丸が装填されてないことを確認すると、「ホイッ」と愛銃を手渡してくれた。

『機能美だなあ！』ズッシリとした手応えとともに、武器に備わった凄みと美しさを味わうことが出来た。

司令官を見ていると、通常通りに軍用ジープに乗らず、何故重戦車で来たのかという理由が解った。敬愛する兄貴分に立派な将軍に出世したことを悪戯っぽく報告したかったからだろう。筆者は筆者で、将軍の拳銃を鑑賞できたり、部下が三名アテンドして来たことからして、重戦車の操縦員は3名らしいことも観察できた。

結果的には、湾岸戦争勃発の3日前のこと。アブ・イヤドから話があるから来るようになると連絡があった。そこにいたのは、いつものにこやかな彼ではなかつた。

その日、妻も次男のイブラヒムも国内の安全圏リヤドまで退避させたとのことだ。

筆者が最後の最後まで自分の任務を守ることを知っているアブ・イヤドは、2丁の拳銃を出して、こう薦めてくれた。

「ミスター・岡本も武装しておく必要がある。2丁あるから、気に入った方を持って行ってくれ」。

この破格の好意には本当に驚愕した。実は、日本人と違って、サウジ人は全員武器を所持している。神経質な男なら、自動車のダッシュボードの中に常備しているという。そこまで心配してくれている友情には心から感謝するのだが、外国人の武装は絶対的タブーであり、むしろ禁令違反の罪科の方がもっと危険と言える。そう回答して、格別のご好意は辞退することにした。

「そうか・・」。

対話の意味は、もっと深かったのかもしれない。石油省高官であるとともに、カタール軍司令官とも親戚であるアブ・イヤドのことだから、我々外国人と違って情報の中核に接している。開戦が間近かに迫ったことを知ったに違いない。しかし、深い深い信頼関係にあるとはいえ、外国人である筆者に誰からどんな情報を得たなどとは絶対に言えないから、「武装しろ」という表現に、言外の言を託したのだろう。

『任務全うも大切だが、死んだらどうする。ミスター・オカモトも逃げろ！』

現在は、Face Book などという便利な情報交換できるツールに恵まれている。

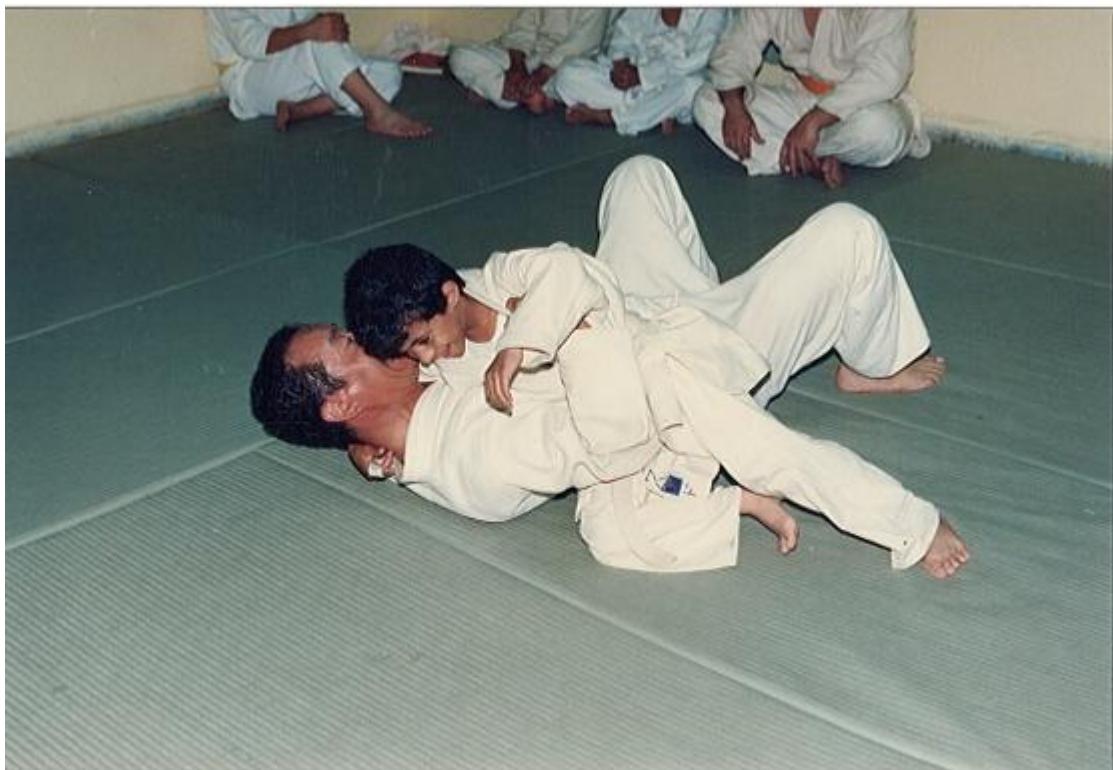
「Sensei Okamoto はどうしておられるのか？」という関心から、筆者を探してくれていた弟子たちは沢山いてくれたようだ。最初に筆者との交信に成功したのは、現在は米国の住人となったパレスチナ人のラエッドだった。彼ら独自のネットワークがあるから、情報は直ちに横に広がった。現在、F B で繋がっているカフジ時代以来の知人は30人以上を数える。

Eyad とは、別の流れで交信するようになった。現在は、世界最大の産油会社 Saudi Aramco の幹部社員として健闘している。元気な息子にも恵まれて幸せな家庭も築いたようだ。交信の都度、Abu Eyad に宜しくと伝言するのだが、本人はパソコンが苦手のようで、残念ながら直接のメッセージを受け取ったことはない。

この5月に、Eyad から Abu Eyad がリヤドの自宅で逝去したとの悲しいメッセージを受け取った。その瞬間、今回ここに記述した全ての思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。筆者は、カフジでの Abu Eyad との邂逅に心から感謝するし、今回のエッセイを天国の彼に捧げたい。Abu Eyad の靈よ安らかなれ。本当に誠意溢れる友情を尽くして頂いて有難うございました。



青年の弟子には厳しく指導



幼い弟子には優しく指導

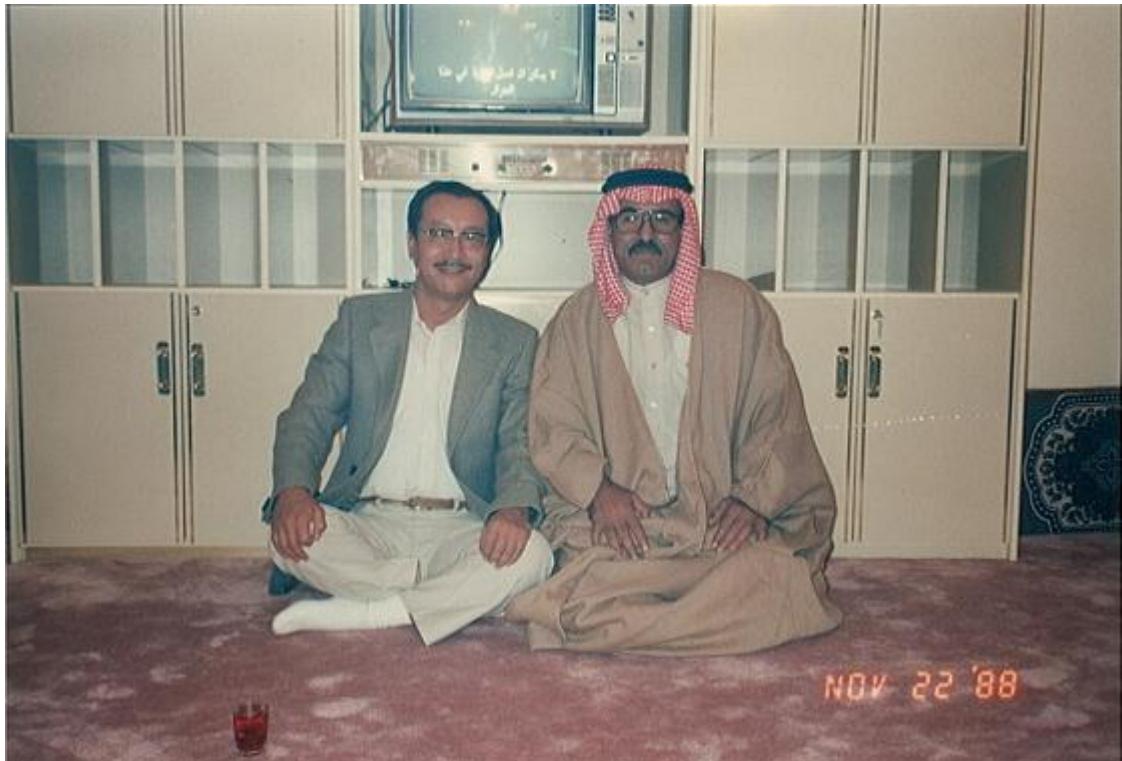
To be continued

Documentary Essay

"Judo Gymnasium in the Desert Country" - Chapter 8:

Mutual Trust Relationship Transcend Ethnicity, Abu Eyad

Fumio Okamoto (Former Arabian Oil Company, Former Secretary of State for Policy)



I was often invited to Abu Eyad's home.



Celebrating Eyad's graduation(Hokkaido Institute of Technology) at my home in Tokyo.

Hassan and Riyad(both ,Nihon University) also came to celebrate.

In Arab society, calling someone by their first son's name is considered polite, and as a sign of trust, they add "Abu (Father)" before their first son's name. If their eldest son's name is "Eyad," they call him as "Abu Eyad ." In other words, it shows how much you care about your family, and signifies a deep relationship where you know you won't leave them alone if an emergency were to arise. Incidentally, a mother is called "Umn Eyad (Umn means Mother)." As a result, the Arab friends I became close with called me as "Abu Eiichirou (Eiichirou's father)."

Now, Abu Eyad's real name was Mr. Mohammad Al Subei, a high-ranking official in the Ministry of Oil. The Okamoto Dojo reopened during my second stint in Khafji, and among my students was an agile boy named Ibrahim, Abu Eyad's second son. Grateful for the judo lessons I had given his son, Abu Eyad occasionally invited me to his home.

The Arabian Gulf is right in front of the government officials' residential area, and Ibrahim, knowing that Japanese people like fish, would go fishing for me. Abu Eyad would grill the fish with salt and serve it to me, much to my delight.

We had a great time recounting our life stories and backgrounds during the long nights in Khafji, when there was no television (although there were two channels of TV).

Abu Eyad's request was about his eldest son, Eyad, who was studying at Hokkaido Institute of Technology on an Arabian Oil scholarship. He asked me to take good care of him when I returned home for long vacations or when I returned to the head office.

"Why not?" I had always had a close relationship with Arab overseas students. Before bringing students to Japan, Japanese teachers would come to Khafji for a six-month orientation, and I was always asked to help teach them "What is Japan?" During the orientation for Hassan, the eldest son of the Judge who is second in rank to the Khafji district governor (Amir), I invited him to stay at the company housing in Khafji to give him an idea of what a Japanese family is like. Also, when he went to study at Nihon University, I was back at the head office, so he came to our house, like a foster parent, and played with my son.

As part of the orientation, Japanese teachers would routinely bring his students

to my judo dojo. Unfortunately, none of them lasted long. When I asked why, I couldn't help but laugh. He said that while the established boys and children could recite the chants from "ichi" (one) to "jyuu" (ten) without a hitch, the students would yell nonsensical calls, and were therefore teased and ridiculed (laughs).

Even so, Iskandar, who taught the basics of judo at the time, studied at Daito Bunka University and later became a diplomat at the Saudi Arabian Embassy in Japan. He helped me out in many ways when I was assigned to the General Affairs Dep't of head office.

While we're on a tangent, here's a funny story. Iskandar was aware of my hobby and invited me to go fishing. Two blue-numbered embassy vehicles headed to Honmoku Pier in Yokohama port.

"Hey, isn't this a restricted container yard?"

"Sensei, no problem. We don't understand Japanese. Please disguise yourself as a Saudi."

Of course, several security guards rushed over and ordered us to leave, but dialogue was impossible.

The car had diplomatic license plates, so the guards had no choice but to give up and let Iskandar and his men stay. Having just returned from the area, I was still tanned and had developed a beard, so all I had to do was speak some broken Arabic. Although fishing is normally prohibited in this area, there was a bumper crop of rockfish. They don't eat fish with big heads, so they gifted me all their catch, and my family was able to enjoy stews and fish stock soup for the next few days. (laugh !)

Now, Eyad, is studying abroad at Hokkaido Institute of Technology. I invited him to my house to catch up on the latest news from his family in Khafji and treat him to some of my wife's home cooking. To my surprise, he brought a large Yubari melon, a Hokkaido specialty, as a souvenir. Of course, my son became friend of him.

To introduce my activities in Khafji, I showed him an album of a judo demonstration I did at the Khafji Marathon, the city's largest event, which was requested by the local authorities. Eyad responded, "Oh, that's me." To liven up Khafji's biggest event, the equestrian club had also been mobilized, with thoroughbreds parading around the inner perimeter of the grounds. The judo demonstration took place in the center of the inner field, and Eyad, who was riding for the parade, naturally had his eye on my activities. Needless to say, this new connection sparked lively conversation.

When Eyad returned to Hokkaido, he sent me a letter with a polite message expressing his gratitude for the invitation. The Japanese-Arabic Bilingual Commentary on the Holy Quran, published by the Japan Muslim Association was

also sent. It's the perfect gift a Saudi could give to show their gratitude. Needless to say, Eyad's thoughtful gift remains a central part of my bookshelf still today.

So where does this thoughtful consideration and politeness of the Abu Eyad family come from? According to life stories we shared over the long nights in Khafji, Abu Eyad was originally a member of the royal family of neighboring Qatar. However, when his mother became embroiled in a bitter family feud over the succession to the throne and feared for her life, she took young Abu Eyad and fled to Qatif, a fishing village in Saudi Arabia across the Qatari peninsula, where he grew to adulthood. It's almost like the story of Tokiwa Gozen, who fled to Yamato with the young Minamoto no Yoshitsune to escape being assassinated by the Taira clan. It's easy to imagine that the hardships and trials Abu Eyad experienced helped to nurture his compassionate and honest character. The fact that Abu Eyad was respected by all the staff of my shipping office I oversee, despite having no direct business relationship with them, is proof that his virtues were widely recognized.

Although we were on friendly terms, we had no business relationship whatsoever. However, there was only one time when he helped me out, and I felt extremely grateful for his help.

Khafji was equipped with a small-scale refinery with a daily capacity of 30,000 barrels, producing four types of petroleum products to supply fuel for inbound tankers, heavy fuel oil to the local desalination plant, and diesel to Coast Guard vessels.

Although a Japanese company was under strict control by the Ministry of Petroleum. Among the various taboos, the most severe penalties were imposed for any crude oil or petroleum product spills.

My responsibilities extended beyond the loading of crude oil onto inbound tankers to include local supplies. An aging diesel pipeline was showing signs of a leak, and it was determined that the pipeline needed to be rerouted.

I had drawn up the design drawings, and I prepared a covering application myself to obtain construction permission from the Ministry of Petroleum. In charge director handed its application, but without even glancing at it, said "Hmph!" and threw it to the floor.

What rudeness! (Angry !) It was typical Arab-style bargaining: "If you want a permit, bring me something." It wasn't my own gain, nor was it the right attitude toward an attempt to ensure safe oil operations as instructed by the Oil Ministry. Regrettably, however, the authority to grant permits and licenses remains on him.

The difficult part here is that frantically picking up the discarded application documents puts me at a complete psychological disadvantage. Suppressing my inner rage, I cracked a joke.

"Wow, you're a good pitcher! You even played baseball when you were studying in the US. Hahaha."

(You bastard ! Just take a look !) I immediately headed to Abu Eyad's office.

"Oh? That's unusual, Mr. Okamoto. What's up with you today? (laughs)"

Although I'd visited his home many times, this was my first time visiting his office. After hearing the details of what had happened, Abu Eyad instantly shared my rage. He picked up the phone and yelled, "Wa-wa-wa-wa!" I had no idea what he was saying in Arabic, but I surmised it was something along the lines of, "Don't underestimate Okamoto, you're not going to get away with it!"

"OK, Mr. Okamoto. That's all. Try again."

The director greeted me with a polite smile and rubbed his hands, and I couldn't help but laugh at his sudden change of attitude.

"You're a bad person, Mr.! Why didn't you tell me you knew Abu Eyad from the start?"

I don't really understand the hierarchy within the Ministry of Oil, but it seems Abu Eyad is a high-ranking official. Thanks to him, the diesel oil line leak was averted.

Abu Eyad had a very playful personality.

The six months leading up to the outbreak of the Gulf War on January 17, 1991, were a period of terror known as the "Gulf Crisis." In response to Saddam Hussein's sudden and unreasonable invasion of Kuwait, a multinational force led by the United States was formed and demanded the immediate withdrawal of Iraqi troops. As part of this series of events, Qatari and Senegalese forces were deployed to defend the Khafji region, adjacent to the Kuwaiti border. I once witnessed the Senegalese army on the move, and they seemed to have difficulty forming formations, lacking discipline and spirit, which made me wonder whether they were really useful.

About a month after the Gulf Crisis began, I received a call from Abu Eyad, who said his cousin was visiting and asked if I would like to drop by.

As this was always the case, I had been casually visiting, but I was taken aback. A heavy tank was parked in front of Abu Eyad's house. It was unusual for a tank to enter or leave a residential area for high-ranking government officials.

There were three soldiers inside the house, and the boss, leaning on a stool, gave

me a sharp glance while his three subordinates jumped to their feet and assumed a guarded stance.

"No, it's okay, it's okay. I called him over to introduce you to a Japanese friend."

Abu Eyad interceded with a smile. The cousin he was introducing me to was the Commander of the Qatari military, which had become part of the multinational force. This mutually surprising encounter was a classic Abu Eyad prank. Addressing the military commander as an elder, it was clear that Abu Eyad's claim to be a member of the royal family was no bluff.

I was intrigued by the pistol the commander had on his waist. His equipment was impressive, a testament to his status as a general. It resembled a Luger, a famous rifle from the German military of the past.

"General, may I touch your pistol for a moment?"

How rude of you to shoot me! The commander thought annoyed, but Abu Eyad interceded.

"It's fine. This Japanese man is a special friend, so let him touch it for a moment." With an air of 'I guess I have no choice,' the general pressed the button next to the trigger to extract the cartridges, slid the bolt back to make sure it was empty, and then handed his beloved pistol back to me.

"What functional beauty!" I was able to appreciate the weapon's power and beauty, along with the solid feel it had in my hand.

Looking at the commander, I understood why he had come in a heavy tank instead of the usual military jeep. Perhaps he wanted to mischievously announce to his beloved big brother that he had been promoted to a fine general. As for me, I was able to admire the general's pistol, and judging from the fact that three of his subordinates were accompanying him, I was also able to observe that the heavy tank was likely driven by three people.

As it turned out, it was three days before the outbreak of the Gulf War. Abu Eyad contacted me and asked me to come over because he had something to discuss with me. He wasn't his usual cheerful self.

That day, he told me he had evacuated his wife and second son, Ibrahim, to Riyadh, a safe haven within the country.

Knowing that I would stick to my mission until the very end, Abu Eyad took out two handguns and recommended them to me.

"Mr. Okamoto, you'll also need to be armed. I have two, so take whichever one you like."

I was truly astonished by this extraordinary kindness. In fact, unlike Japanese

people, all Saudis carry weapons. Apparently, the more nervous men keep one on the dashboard of their car.

I was truly grateful for his concern and friendship, but arming foreigners is an absolute taboo, and the crime of violating the ban would be even more dangerous. With that, I decided to decline his kind offer.

"I see..."

The significance of this conversation may have been even deeper. Abu Eyad, a high-ranking official in the Ministry of Oil and a relative of the Qatari military commander, had access to the information center, unlike us foreigners. He must have learned that war was imminent. However, despite their deep and deep relationship of trust, he could never tell me, a foreigner, what information he had received from whom, so he probably implied something in the phrase "arm yourself." "Fulfilling your mission is important, but what if you die? Mr. Okamoto, run away too!"

Today, we are blessed with convenient tools for exchanging information, such as Facebook.

It seems that many of my students, curious about Sensei Okamoto's life, sought me out.

The first person to successfully communicate with me was Raed, a Palestinian now living in the United States. Thanks to their unique network, information spread quickly. I currently have over 30 Facebook acquaintances I've known since my days in Khafji.

I began communicating with Eyad through a different channel. He is currently working hard as a senior officer at Saudi Aramco, the world's largest oil company. He seems to have built a happy family with a healthy son. Each time we communicate, I would send my best regards to Abu Eyad, but he seems to have difficulty using computers, so unfortunately, I have never received a direct message from him.

This past May, I received a sad message from Eyad informing me that his father had passed away at his home in Riyadh. At that moment, all the memories I have written about here flashed through my mind like a slideshow. I am truly grateful for my encounter with Abu Eyad in Khafji, and I would like to dedicate this essay to him in heaven.

May Abu Eyad's soul rest in peace. Thank you so much for your sincere friendship.



I was strict with my young disciples.



I was gentle with his younger disciples.

Fumio OKAMOTO

Born in 1947. Former Arabian Oil, Former Secretary of State for Policy in Japan,

Author of “Gulf War, -The Epic of Oil Men”

Kodokan Judo 5 dan, Kuwait Judo Federation 7 dan

To be continued